不登校児をもつ母親の心理面接における支援について

児　玉　龍　治

はじめに

不登校を含む子どもの問題行動に対して、母親がその子どもの愛情要求を満たすことの重要性が様々な論者により指摘されている。

黒川（1993）は、母子分離不安による不登校児をもつ母親が子どもに対して愛情を与えることが、不登校が回復していくために必要であると述べている。つまり、黒川によれば、母親が子どもを可愛がることにより子どもに退行現象（「自我に奉仕するための退行」regression in the service of ego）が起こるが、それは子どもに変化が生じていることを示しており、立ち直るための前進であるとされている。また、子どもがこうした退行現象を起こしたときに、母親がそれを受けいれることができず拒否するということは、ちょうど春風が吹いて草木は新芽を出すが、新芽を出したとたんに、冬に逆転して木枯らしが吹くと草木が落ちてしまうのと同じことであり、母親が子どもの退行現象を持続して受容することが極めて大切であるとされている（PP190—195）。

田中（1992）は、幼児の問題行動の消失に、母親による「甘えなおし療法」が大変効果的であることを見出したとしている。そして、この「甘えなおし」とは、「甘え体験をやりなおすことで、逆説的に甘えをなおす」やり方をさし、古くは川端つねによって提唱された「再育児療法」の流れを汲む日本独自のやり方であると述べている。

また、田中は、不登校に限らず様々な問題行動があるが、治療の回復過程で子どもが示す母親との関係の変化には、一定の順序性があることが、さまざまな事例の分析を通してわかってきているとしている。そして、その段階は、段階1「ためしながらのぎこちない甘え」、段階2「身体的な甘え」、段階3「要求・不満の出はじめ」、段階4「よい母親の内在化をめぐる独占・支配とアンビバレンツ」、段階5「自分の好みがいえる」、段階6「自然な母子の会話・通じ合い」の6つの段階があるとしている（PP149—159）。

面接の初期においては、まず三男の不登校がどのタイプであるのかを判断するために、クラ

50

松尾（1996）は、幼年期から青年期にかけての問題が増加しつつあるこんにち、過保護や甘

52

イエントから三男の生育歴や現在の状況について尋ねていった。すると、先に述べたことが明らかになり、筆者は、「学校に行きたくても行けない」神経症タイプであると判断した。そこで、筆者からは子どもの学校に行きたくても行けない苦しみを理解し、受けいれてあげてほしいという指示を伝えた。

＃4では、三男は次第に食事が3食食べられるようになってきたが、クライエントからは「長男が暴力をふるうようになったときには、わたしも暴力で対抗しました」と、クライエントの攻撃的な面が語られるようになった。

＃7では、三男はクライエントにかまってほしい様子がみられ、ちょっかいを出したりするが、クライエントからは「子どもからの要求に対して少し疲れるときがあります。体力的にしんどいところがあり、『うざったいなあ』と思うこともあります」と、子どもの退行現象に対するクライエントの抵抗感が語られた。

#17では、クライエントの小さい頃からよく見る夢が語られた。

「わたしは戦争をしている夢をよく見ます。隣の人をけおとしたりするんです。」〈そういう夢はよく見るんですか？〉（以下、〈 〉のなかはカウンセラーの言葉である。）「そうですね。よく見ます。子どもの頃からよく見ていました。」〈その戦争の夢というのは、どのような夢ですか？〉「怪獣が市内をあばれているんです。それでわたしが家族を逃がして自分だけ怪獣と戦うんです。それからどこか裏口から逃げて、落ち延びるような夢なんです。」〈お父さんやお母さんも逃がすのですか？〉「そうですね。夢の中ではわたしは大人なんです。」

〈いつ頃からその夢は見ているのですか？〉「中学生の頃から見ていたように思います。わたしはなぜか5～6人の大人に指示をしているんです。そしてマシンガンのようなもので人を殺しながら行くんです。」〈どのような思いをそのときは持っていたのですか？〉「国を守るのは自分の役割であると思っているんです。兵隊は人としては見ていないんです。」〈そのときはどのような気持ちですか？〉「悪い気持ちではないです。」

〈そういう夢を見ていたということですが、現実の生活ではどのような子どもでしたか？〉「わたしは小さい頃から「よい子」だったと思います。」〈夢と対称的ですね。〉「そうですね。わたしは小さい頃から「いや」と言えないところがありました。」

筆者はこの夢を聞き、クライエントの内面にうずまく激しい攻撃心を感じた。また、それとともに、小さい頃から「よい子」であり、表現できなかったクライエントの真実の感情にクライエント自身がふれていくことが、子どもを理解し、うけいれるためには必要であると考えた。

そこで、積極的にクライエントの幼少期の感情に焦点を当てて尋ねていった。すると、#19では次のような話が語られた。

「最近、わたしは自分の母のことを嫌いだったんだなあと思うようになってきました。夢の

中で母がわたしに「そんな格好でわたしに恥をかかせるのか？」と言うんです。それで目が覚めるんです。そのとき、母はオシャレで若々しいんです。とても外見がいいんです。」〈夢の中でそうなんですね。〉「はい。でも、現実にも嫌なことを言うんです。わたしの着ているものについて、「もっと明るい色を」とか、「男の子に生まれていたらよかったのに」とも言うんです。」

また、#26では同様にクライエントの母親に対する次のような怒りの感情が語られた。

「わたしは小学校5年生くらいから食事の後片付けなどをしていたのですが、そのために手がささくれだっていたんです。母はそのわたしの手を見て、「親不孝だからそうなるんだ」と言うんです。また、腰を痛めたときには「人の要になって働かないからそうなるんだ」と言いました。」〈そのときにはどのように思いましたか？〉「腹が立ちました。せっかくいろいろなことをやっても甲斐がないと思いました。」

この時期中学校3年生になった三男は新学期の最初は登校するが、次第に行ったり行かなかったりという状態になる。#29ではクライエントは補習に行こうとしない三男に対して、『いいかげんに自分のできないことを認めて、補習に行ったらどうか』と思い、「全然起きようとしない三男をしばきました」ということが語られた。筆者にはクライエントの中にある怒りにクライエント自身が気づき始めてはいるが、いまだにふれていない部分も多く存在するように思われた。そして、クライエントが三男を受けいれるためには、今後その怒りに気づいていくことが大切であると思われた。

第2期：クライエントが母親に抑えていた感情を伝える時期《#30～#44》

第1期に気づきはじめたクライエントの母親に対する怒りは、次第に身体レベルでのものとなっていく。それは次のように語られた。「母に思いをどう伝えようかと思って、夜寝られなくなるときがあるんです。」(#32)、「母が近いうちにわたしのところに来ると言うんです。そのことを思うと、頭痛がしてきたり、眠れなくなってきたんです。」(#34)、「母はわたしの進路については、勝手に決めようとするようなところがありました。その頃はあまり何も思わなかったのですが、今考えるとゾッとする感じがします。」(#35)

そして、#37にはついにクライエントは母親と大喧嘩をすることとなった。そのときの様子についてクライエントからは次のように語られた。

「母が愚痴を言い出したので、腹が立ってきて、これまでのことも含めて、母に言い返したんです。そしたら母は、「わたしが悪いんやね。謝ったらいいんやね」と言うんです。でも、その言い方に険があるんです。そのうち、「もうしゃべらへんわ」と言って、電話が切れました。」〈そのときはどのように思われましたか？〉「『これはダメやわ』と思いました。」〈今まで

言い返されたことはあるのですか？〉「ありません。はじめて言いました。今までは気がつかなかったので。」〈はじめて言ってみてどうでしたか？〉「電話をしているときから涙が出てとまりませんでした。」

…「反抗期が遅かったのかもしれません。もっと早く気づいていたらよかったのですが。」〈もっと早く気づいていたら、どうなっていたように思いますか？〉「長男につらい思いをさせなかったように思います。子どものお陰で気づけてよかったと思います。」

また、#43には、クライエントから、母親が来るという連絡により、夜中まで寝られなかったこと、さらには母親に対して「あんたが来たら大気汚染になるので、来ないで」と言いたいことが語られた。

第３期：子どもの感情を抑えていた自己をみつめる時期《#45～#70》

母親への怒りに気づき、その怒りを伝えるようになってきたクライエントは、第３期においては、母親に感情を抑えられていた自分が今度は子どもに対して同じことをしてきたことに気づき、そのことをみつめていくことになる。

#45において、前日に見た２つの次のような夢がクライエントから語られた。

「１つ目の夢は、わたしが３人の子どもを殺すんです。３人の子どもというのは、次男、長女、三男なんです。それで、凶器は針のような細いもので、プチプチと刺すんです。そして、死体を森の中の他人の墓に入れて、埋葬するんです。埋めて、ばれないなと確認するんです。」

「もう１つの夢は、実家にいるんです。子どもを殺したということで、苦しい思いをしているんです。そんなときに、父の部屋から三男が出てくるんです。そして、わたしのことを「大丈夫」と言って慰めてくれるんです。それで、なんとか落ち着こうとしているときに目が覚めたんです。わが子を殺すという夢は今回が初めてです。」

筆者はこの夢を聞き、クライエントが子どもの感情を抑えてきたことに気づきつつあるのではないかと感じた。また、父親と三男がクライエントにとっては助けになっており、この２人の助けを得て、これから子どもの感情を抑えてきたことに向き合っていくのであろうかと感じた。

#53では、子どもを追い込んだことに対する後悔の念が次のように語られた。

「長男を追い込んだのはわたしだと思うんです。」〈追い込んだというのは？〉「長男が16、17のときだったと思うのですが、猫を２匹もらってきたんです。それで長男は家で飼いたいと思っていたのですが、祖母が猫に対する思いを持っていたんです。」〈思いというのは？〉「因縁として猫にたたられるというものなんです。それで、祖母は「捨てろ、捨てろ」と言うんです。そして、いろいろと因縁を聞かされたんです。もうそれはどうしてもあらがえないような感じ

で、仕方なく長男に捨てるように言ってきかせたんです。でも、そのことがわたしの中にずっと引っかかっているんです。」〈今思い返してどのような思いがわいてきますか？〉長男に対して申し訳ないという思いと、自分自身に対してもそんなことをしてしまったという腹立ちが起こってきます。自分を責める気持ちが起こってきます。」

また#62では、同じく長男に対する後悔の念とともに長男に対する気持ちの変化について次のように語られた。

「わたしはカウンセリングを受けて、三男との関係においてはいろいろなことが学べたと思うのですが、なぜ長男のときに気づけなかったのかと思うんです。長男を追い詰めたのはわたしではないかと思うんです。そのときのわたしは大人でもなく、親でもなく、社会常識で子どもに対応していました。」

「長男との関係はまだ乗り越えられていないような気がするんです。今は長男のことが可愛いと思います。前は嫌いでした。」

そして、#63では、クライエントから「今後は母とわたしとの関係をふりかえっていくことが、わたしと子どもとの関係をみていく上で大切になってくると思うんです。」と語られた。

この時期三男は中学には結局行けないまま卒業を迎えたが、高校に合格し、4月から高校に通い始めるようになった。当初は緊張のためか、夜眠れないまま登校するということもあったが、クライエントからは「安心してみていられるようになってきました。」(#67)、「安心できるようになりました。」(#68)、と次第に安心する言葉が語られるようになってきた。

また#69では、以前に比べてクライエント自身少し「ゆとり」が出てきた様子が次のように語られた。

「カウンセリングを受けるまでは、わたしはすごく攻撃的であったと思います。常に戦っていました。カウンセリングを受けて、少し「ゆとり」が出てきたように思います。そうすると、相手の動きが見えてきたように思います。」〈なぜゆとりがでてきたように思われますか？〉「そうですね。相手の気持ちを知ろうと思うようになってきたように思います。三男が学校に行かないようになり、三男への怒りでカッカしていたのですが、先生から「○○くんは我慢していたんですね。」と言われて、そうかと思いました。その他の人についても、その人の気持ちや経験を考えるようになりました。気持ちをぶつけてもうまくいかないというふうに思うようになりました。」

第4期：クライエントが新しい自己を生きる時期《#71～#98》

第3期の最後においては、三男が高校に安心して行けるようになったことから、クライエントと筆者はそろそろ終結をと考えていたところであった。しかし、今度は長女が高校に行かな

い日が出てくることとなった。そこで、クライエントの方から、もうしばらく面接を継続したいという申し出があった。三男については、クライエントが自己を見つめ、三男に対して理解を示し受けいれたことと環境の変化により回復に向かい、登校へとつながったと考えられる。しかし、長女は三男に比べてクライエントの気持ちが伝わりにくかった。この第4期においては、その長女に対して、クライエントが新しい自己を生きること、つまり子どもを理解し、受けいれることにより向き合う過程が展開されていくことになる。

#71では、クライエントは長女への思いを次のように述べている。

「わたしは、先生の話を聞くまでは娘は大人として扱ってほしいのかなと思っていたのですが、今はそうではないのかなと思います。娘に殻があるのであれば、それをつつみこんでやる方に重点をおかなければいけないと思います。」

しかし、長女はクライエントに対して、#75では「前のお母さんの方がよかった」というふうに言っている。また、#77では、クライエントから、長女が高校を休学したこと、#78では外泊するようになったこと、#79ではほとんど家に帰ってこなくなったこと、また男性とのつきあいがあることなどが語られた。

こうした状況のなかでクライエントからは長女に対する怒りの感情と心配な感情が語られるようになってきた。#79では次のような話が語られた。

「長女に対してはどこか譲歩しすぎかなと思うときもあるんです。」〈ここでは本当のお気持ちをお話いただければと思います。娘さんの様子をみておられてどのように思われますか？〉

「そうですね。本当のところはしばいたろかと思うことがあります。」

「夜寝られないんです。妊娠していたらどうしようというふうなことも考えるんです。少しわたしの気持ちを抑えているように思います。」

また#82では、家を出て行こうと考えている長女に対する感情として、クライエントから次のような話が語られた。

「長女のことをもう少し客観的に見られたらと思うのですが、なかなかそうできません。長女のことを考え出すと、頭が痛くなってくることがあります。」

長女はクライエントが長女を理解していこうとする姿勢に対して抵抗を示し、やがてクライエントに対して「死ね」と言い、攻撃的な態度をみせるようになった。そのときの感情をクライエントは次のように述べている。(#83)

「(死ねと長女から言われて) 長女のことを突き放したくなりました。長男のときはいまの長女のときと違って、いろいろなことに対して、わたし自身がこたえませんでした。ですから、すごく気が強かったんだと思います。長男からいろいろといわれたときも、こちらの力を見せたいという気持ちになっていました。でも、今は少し違うんです。長女に「死ね」と言われて、

やはりショックでした。」

その後クライエントは、次第に長女がクライエントを拒絶する態度に対して苛立ちを見せるようになる。#87では、クライエントから次のような話が語られた。

「長女に対して、『言うことをきけ』というふうに思います。長女は携帯電話をわたしからはつながらないように細工しているんです。それはわたしとの絆を切っていると思うんです。」

また#88では次のような話が語られた。

「わたしからの連絡を拒否するのはおかしいと思うので、「調子にのるな」と言いました。長女はメールアドレスは教えてくれたのですが、「返事はしない。期待するな」と言いました。」

そして、こうした長女の態度に対して辛抱強く長女にかかわりつづけたクライエントもついには、「ここ2日間は力が抜けてきました。長女は突き当たるまで転がっていかないとしょうがないと思うんです。」と力なく話すようになった。

また、#90では長女のことにかかわって起こってきた身体症状について次のような話が語られた。

「長女のことがあってから、胸の一部がさしこんでくるような痛さが、2～3度ありました。また、胃や胸がやけつくような痛さがありました。」〈それはどのようなときになりましたか？〉「長女が夜に帰ってこなくて、不安だったときにそういう感じになることがありました。」

筆者はそうした話を聞くなかで、クライエントが長女と向き合うことの難しさの一端を垣間見たように思えた。また、こうした状況のなかでは、クライエントが自らのからだをいたわることの必要性を強く感じた。そこで、クライエントには自らのからだからのメッセージに関心を向けていくことが、自己の状態に気づく上で大切であり、今はからだを休めてあげてほしいと伝えた。クライエントも、「今は身体の具合を目安にして気分転換をしようと思っているんです」と話した。

このようにクライエントは身体症状に苦しむほどに苦悩を抱えていたが、#91に長女についに少し変化が見られるようになった。そのことについては次のようにクライエントから語られた。

「長女はこのところは夜早く帰ってきたりします。食事も2階に持っていったりすると、黙って食べるようになりました。怒ったりしたときにはほったらかしにしていたのですが、この前1回だけ「ありがとう」と言ってくれました。〈よかったですね。〉「ええ、小さい声ではあったのですが、わたしに対して「いらん」とも「どっちでもいい」とも言うのではなく、無言だったりしたのですが、少し気持ちが出てきたのかなと思います。」

また、#97では長男との間のやり取りの中でも変化が見られたことが、次のように語られた。

「長男はこの頃少し自分の弱いところを口にできるようになってきたように思います。…そうしたことを出せるようになってきているように思うんです。」

第5期：クライエントが苦しみの経験のなかに面白さを感じる時期《#99～#103》

これまで苦しみと向き合ってきたクライエントが、第5期においてはこころのゆとりを感じるようになり、それまでいろいろとあったことを「面白い」と感じるようになる。

#99では、次のような話がクライエントから語られた。「わたしは、この頃いろんな家庭があっていいのかなと思えるようになりました。苦労があっても、楽しいこともあるし…と思います。気長に、気楽にいこうかと思っています。4人の子どもは調子がいいときも、悪いときもバラバラです。でも、それでもいいと思っています。」

また、#100では次のような話が語られた。「子どもを動かすことはできないように思います。一人ひとりが自分の道を歩いていってもらえたらと思います。」

この時期、筆者が相談室を退職することをクライエントに伝え、面接を終結するか後任者に引きつぐかどうかの意向を尋ねたところ、クライエントからは次のような話が語られた。

「わたしとしてはこころのゆとりがでてきましたし、余裕がでてきたように思うんです。子どもたちもそれぞれ歩き始めていますし、ここで終わりにさせてもらいたいと思います。」

最終回である#103ではクライエントから次のような話があった。

「今はいろいろとあったことが面白いと思えます。」〈面白いと思えることは、とても大切なことだと思います。〉「それは父の影響だと思うんです。父はトラブル解決の過程をわたしにすごく面白く話してくれたんです。」〈お父さんからいただいたものがいきているというか、助けてくれているような感じですね。〉「そうですね。生きているときは気づきませんでしたが。」

考察

ここでは、本事例をもとに、身体症状があらわれるというような危機的な状況においこまれた不登校児をもつ母親の心理面接における支援について考えていきたい。

1．現在の状況が母親の許容範囲を超えていないかどうかの確認について

母親が子どもを可愛がることにより、事例における三男のように、子どもが母親に対する愛情要求を比較的素直にあらわす場合がある。しかし、その一方で、長女のように逆に子どもが攻撃的な態度をとる場合もあると考えられる。

渡辺（2000）は、退行には「悪性の退行」と「良性の退行」の2種類があり、「悪性の退行」は精神症状や精神医学的状態像が含まれる、としている。愛着要求が背後にありながら、その感情が目的にかなった機能を発揮できず、歪められたり破壊的になったりするものであり、嫉

妬にかられて妄想を抱き、好きな相手を傷つけるのがよい例であるとしている。一方、「良性の退行」は、より無力で依存的な乳幼児の気持ちを素直にだすことにより、自分の不安や淋しさや怒りを癒し、元気になろうとするものであり、次子が生まれたときの子どもの赤ちゃんがえり、過剰なストレスのもとで仕事をやり遂げたあとのどんちゃん騒ぎ、などがよい例であるとされている（P67）。

黒川（1993）は不登校児が示す退行現象に対しては、それを母親が持続的に受けいれることが大切であるとしている（PP190-195）。

しかし、母親が子どもを受けいれようという思いをもちながら、子どもから激しい攻撃的な態度を向けられるときには、母親が心理的な傷を受けることもあると考えられる。それゆえ、母親が子どもを受けいれようとするにもかかわらず、子どもから激しい攻撃的な態度を向けられるようなときには、カウンセラーはクライエントである母親の言葉のみならず、より現状を正確にあらわすと思われる身体症状に着目することが大切であると考えられる。そして、そうした身体症状に着目することにより、現在の状況が母親に心理的な傷を与えていないか、母親の許容範囲を超えていないかどうかということを丁寧に確認していくことが大切であると考えられる。

2．母親が苦悩を手放し、ゆだねるという選択肢があることについて

母親が子どもを動かそうとして可愛がることにより、事例における三男のように、子どもが退行現象を示し、学校に行き始めるというような動きをみせる場合と、そうではなく、長女のように逆に子どもがそうした母親のかかわりに対して抵抗を示す場合がある。黒川（1993）は先にも述べたように、あくまでも母親が不登校児を持続的に可愛がることを重視している（PP190-195）。

しかし、本事例においては、母親が長女へのかかわりのなかで身体症状が生じるようになり、子どもへのかかわりをいったん横におき、自らのからだの具合に目をむけ、それをもとに気分転換をしていこうとしたところから事例が展開し、長女が態度をやわらげることとなった。そして、その後、クライエントは、子どもを動かすことはできないことに気づき、それぞれの子どもたちが自分の道を歩いていってもらえればと思うようになり、それまでいろいろとあったことが面白いと思うにいたった。

そうしたことからすれば、本事例においては、母親がそれまでの子どもを可愛がり、子どもを受けいれることにより、なんとかして自力により子どもをかえたいという姿勢から、自らの苦悩を手放し、そしてゆだねるということが、母親のこころの安定に有効に機能したことが考えられる。

C. L. ウィットフィールド（1987）は、クライエントが痛みに同一化し、完全に体験した後

ではじめて、さらに苦悩し続けるのか、懸念、動揺させるものへの苦悩をやめるかの選択の自由があるという可能性を考慮し始めることができると述べている。さらに、もし苦しみにピリオドを打ち、真にそうする準備ができたと感じるならば、それを手放すことができ、普通その時点にいたってはじめて、わたしたちは「ゆだね」て、真に解放を遂げることができるとしている（PP166-168）。

また、H. L. グラビッィツと J. D. ボーデン（1985）は、ウィットフィールドの考えを引用しながら、現状を受けいれること、コントロールを放棄すること、必然の運命へそれをあけわたすこと、そしてそれから分離すること、これらは幸福を高める技術である、としている。そして、受け入れと放棄を説明する A. A. の標語は、「思い切って手放し、成り行きにまかせよ」「気楽にやれ」「自分を生き、他も生かせ」そして、「信頼して他の人に譲れ」である、としている（PP227-228）。

そうした考えからすれば、不登校児をもち、日々、子どもとのかかわりに悩み苦しんでいる母親には、子どもに対して何とかしようとしてかかわることの先に、母親が苦悩を手放し、そしてゆだねるという選択肢があり、そうした方法が母親のこころの安定に有効に機能する可能性があることが考えられる。それゆえ、身体症状があらわれるなどして危機的な状況においこまれた不登校児をもつ母親の心理面接における支援においては、カウンセラーは母親が苦悩を手放し、ゆだねるという選択肢があることを頭においてクライエントにかかわることが、一つの方法としてあると考えられる。

文献

- H. L. Gravitz, J. D. Bowden (1985) Recovery: A Guide for Adult Children of Alcoholics.
  大越崇訳　1994　リカバリー　アルコール依存症の親を持つ成人した子供たちへの手引き、星和書店
- 黒川昭登（1991）　親と教師のための登校拒否読本、誠信書房
- 黒川昭登（1993）　母とともに治す登校拒否　母子分離不安の治療研究、岩崎学術出版社
- 黒川昭登（1996）　閉じこもりの原因と治療　登校拒否から出社拒否へ、岩崎学術出版社
- 松尾恒子（1996）　母子関係の臨床心理　甘えの中の子育て、日本評論社
- 田中克江（1992）　思春期危機をのりこえて―セラピーと家族の役割―、サイエンス社
- 渡辺久子（2000）　母子臨床と世代間伝達、金剛出版
- Carles L. Whitfield (1987) Healing The Child Within: Discovery and Recovery for Adult Children of Dysfunctional Families.（斉藤学監訳、鈴木美保子訳　1997　内なる子

どもを癒す　アダルトチルドレンの発見と回復、誠信書房)